

古典と現代 第1回

会計と財務の交錯

—岩田巖と現代—

駒澤大学教授 石川 純治^{いしかわ じゅんじ}

かつて岩田巖が指摘した「会計と財務」の交錯という重要な論点は、現代においては岩田の時代とはその装いを新たにして現象化している。交錯のいわば古典からみて、その現代的特性と問題性を浮き彫りにしてみたい¹。

交錯の現代性

『方法の学』としての伝統的な会計学をめぐる問題は、例えば1950、60年代の資本維持論での『会計と財務との交錯』という関係の中にも見いだされる² (拙著『時価会計の基本問題』310頁)と記したように、岩田が指摘した「交錯」は「方法の学」(計算の学)なる場での交錯であった。しかも、それはその計算主体が企業内の経営者にあり(経営者本位会計)、実物資産(実物経済、現実資本)にかかわる資本維持を基軸にした時価会計問題(資産評価と費用計上の問題)であったといえる。

これに対し、今日の時価会計では、金融優位の経済(金融>実物)という経済的基礎を受けた形での交錯として現象化する。筆者はかつて「(制度・政策も含めて)今日の会計問題を困難にしているもののひとつが現実資本ではなく貸付・擬制資本であり、とりわけその成立・発展過程に応じて会計問題として様相を変えながら現象してくるということも明

らかになるであろう」(同拙著287頁)と述べたが、その擬制(fictitious)資本にかかわる会計問題が、借方側のみならず貸方側としても現象化する。例えば、目下の争点である貸方側の資本と負債の区分問題も、ハイブリッド証券や種類株式に代表される今日の多様なファイナンスに起因する。

重要なことは、現代における「財務」(ファイナンス)は岩田が指摘した現実(real)資本にかかわる財務政策(企業内再投資資金の回収)と大きく性格を異にするという点である。また、今日の会計においては、先の企業内(経営者主体)の観点に対し、企業外の投資家が基本主体となり(投資家本位会計)、さらに言えば、先の「方法の学」に対して、ここではむしろ「現象の学」(制度・政策)としての側面をぬきには説明し難い会計問題として登場する²。ゆえに、交錯の現代性は、岩田流に言えば「方法の学」と「現象の学」の今日的交錯問題でもあるといえる。

交錯と峻別の現代的変容

岩田は、「会計学の発展傾向をかえりみるに、少なくともこれまでの会計学は、視野を主として計算領域に限定し、計算記録の行為を規律すべき会計原則の設定に重きをおいていたように思われる。(中略)シュマーレンバッハ

¹ 本稿は会計理論学会第24回大会(2009年10月)討論会での田中章義教授(東京経済大学名誉教授)の質問に答えた内容に基づいている。

² 「方法の学」と「現象の学」については拙著『時価会計の基本問題』(中央経済社、2000年)補論12.1(308-310頁)参照。

は計算と財務とをはっきり区別している」と述べ、「この態度はかれの流れをくむ、その他の動態論者の遵奉するところであって、かれらは、シュミットとは比較にならぬほど潔癖である」(以上『利潤計算原理』356-57頁、傍点引用者)と記している。

とりわけ、その会計に財務を持ち込んだ典型的な学説としてのシュミットの有機説につき「とくにここで指摘したいと思うのは、シュミットが会計学の伝統的な考えを無視して、通常の会計方法に財務政策を織込んだ点である。すなわち純粋に会計的なものと財務的なものとを、かたく結びあわせた試みについてである。けだし、この両者の交錯こそ、有機説のもっとも著しい特徴であり、静態説や動態説から、はっきり区別されるべき相違点だからである」(同書 325-26頁、傍点引用者)と記したのである。

重要なことは、利潤計算論としての(実体)資本維持と財務政策目標としての資本維持との峻別である。貨幣資本維持とりわけ名目資本維持(原価主義会計)が批判されるのは、利潤計算(会計)の立場(内在的見地)からではなく、財務政策の立場からであるという点が重要なのである。

こうして「方法の学」としての会計学が、会計＝「方法」(資本利益計算)であるがゆえに、財務政策との交錯および峻別の論議は比較的わかりやすい形をとる。しかし、今日の会計においては、そうした(単なる)計算論という場ではなく、「金融>実物」(経済)と「開示>計算」(情報開示志向の会計)とが結びつく形をとるだけに、そこでの会計のあり

方をめぐる議論(交錯と峻別)は前者に比してそう単純ではなくなる。このことは、繰り返せば、現代の会計が「現象の学」なる場を度外視して「方法の学」の場だけでは捉えきれない、という点に現れる。岩田の言葉を借りれば、「視野を主として計算領域に限定し、計算記録の行為を規律すべき会計原則の設定に重きをおいていた」では捉えきれないということであり、そのことは今日の会計問題において「企業会計原則」がほとんど出てこないことにも現れている³。

さらに会計思考というレベルにおいても、岩田が言う「静態説や動態説から、はっきり区別されるべき」という点では共通するが、有機説とは異なって現代の会計の基礎には動態説の思考とは性格を大きく異にする企業価値的思考が横たわり(企業価値志向会計)、企業価値の評価とファイナンスおよび実証研究とが接合する形をとる⁴。岩田がシュミットと比較してシュマーレンバッハを「潔癖」な態度と評した時代とは異なり、現代の会計はその「潔癖」では説けない性格の新たな変貌をとげている。

ここに、岩田の言う交錯と峻別の現代的変容、とりわけ「峻別」にかかわる会計のあり方の今日の問題性が横たわっているといえる。

(2009年12月)

³ この点は、拙著『変わる会計、変わる日本経済』(日本評論社、2010年予定)での「企業会計原則」がでてこないわけ(78-81頁)を参照。

⁴ 詳しくは、拙稿「時価会計と資本利益計算の変容(下)」(『経営研究』第53巻第3号、2002年11月)30-31頁および図表5参照。